おもかき！

秀泉今友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おもかき！

【Ｎコード】
Ｎ６８９０Ｚ

【作者名】
秀泉今友

【あらすじ】
「おもかき！」は、「思いつき書きなぐり」の略です。
文字通り思いついたものを書きなぐって投稿します。
基本１ページ完結！でも後々同じキャラクターで違う話を書くかも！そんな感じの無計画的短編集です！

アマノジャクと自業自得（？）

「おーい、ちょっと右にどいてくれ～」
後ろの男子にそう言われて私は『左』に体をずらす。
「古典の先生が読んでたよ」
そう言われて私は『現代文の先生』を探した。やや不機嫌になりながらも何の用かと訊ねると「このプリントはクラスで配らないでください」だそうだ。
先生、あなたまでも私をアマノジャク扱いですか……さすがに泣けてきた。

私、天之路約（あまのじつづま）には、あだ名がたくさんある。
『アマノ、アマノジ、ツヅマ、ツーちゃん、ツヅ、ツヅちゃん、ツッチ』そして最後に『アマノジャク』
どっかのバカな野郎が私の名前を『つづま』ではなく『やく』と読んだからだ。

『天之路約』→『あまのじやく』→『アマノジャク』。最悪。

名付け親の彼は反省して、それ以降、私を『ツヅマ』と呼んでいたが、周囲の友人が面白がって私のことを『アマノジャク』と呼び、それが広まって今では学校の大半の生徒が私のことを『アマノジャク』と呼んでいる。さらに一部の生徒は、私に何か用がある時、真逆の事を言ってくる。そしてつい先ほど、先生までもが……。ストレスが溜まりに溜まった私は、発信源である彼に「昼間の道では正面に気をつけて」と耳元で囁（ささや）いてあげた。
するとその日以降、彼が帰り道で挙動不審な動きを見せていると、度々耳にする。
いい気味ザマス。オホホホホ……と、罪悪感を振り払うために、

心の中で高笑い。

そしてそれに耐えきれずに後日、「前のあれ、冗談だから」と笑顔で言ったら彼は怯えた眼差しで私を見て、あわてて帰宅し、次の日休んでしまった。

心配なのでその日の内に「いつも明るい君がいないからクラスは静かで寂しい」といった内容のメールを送信。

彼はそれから学校に来てません。なんで？

「二年三組、天之路約。生徒指導室まで来なさい」

突然の、放送での呼び出しにびくびくしながら生徒指導室へ向かう。ドアの前に立ち深呼吸。落ち着いてから二回ノックをして「失礼します」と小声で言う。中には誰も居らず、休み時間終了間際まで待ったが、先生は現れなかった。

次の休み時間、再び同じ内容の放送での呼び出しにびくびくしながら以下同文。

次の休み時間、以下同文。

放課後になり、担任の先生から、なぜ放送に応えたのか、と怒られた。ああなるほど、生徒指導室に来なさいとは担任のところまで来なさいという意味でしたか。いい加減怒るのも説明するのも否定するのも疲れてきたので、とりあえずアマノジャクを演じる。

「わかり易すぎて笑えます」訳：『わかり難すぎて笑えません』

皮肉を込めてそう言うと先生は数秒間考えてから声を荒げた。

「二度と言うな！」訳：『もういっぺん言ってみろ！』

面倒に感じるが、即座に答える。

「わかり易すぎて笑えます」訳：『わかり難すぎて笑えません』

「扶養者の方を追い返すぞ！」訳：『保護者の方を呼び出すぞ！』

このままでは訳がわからないまま私のペアレンツが呼び出され、訳の分からないお叱りを受ける恐れが出てきたので、誠に苛立たし

いのだが、アマノジャクを否定するための説明をした。が、それらは全て逆だと思われた。
「……あの、いい加減面倒なので普通に話しをしてもらえませんか？」
涙が溢れる一歩手前。だがそのためか、ようやく私の話を正しく理解してくれたらしい。
「あれ？　天之路と話しをする時は真逆の事を言わないといけないって話しを聞いたんだが……」
「先生、それは悪ノリから生まれた虚偽です」
「じつはそれも真逆の意味だったり――」
バァンッ、と机を手のひらで叩くと、先生は「悪い悪い」と言って真面目な顔になる。
「実は日下部（くさかべ）が不登校になった原因はお前にある、って保護者の方が言ってきたんだが……、心当たりないか？」
日下部とは、『約（わたしのなまえ）』を『やく』と読んで、呼んだ彼だ。
私が原因？　そんな覚えは……あった。一つだけあった。
「なんだ？」そんなにバツの悪そうな顔をしていたのか、先生が私に訊ねる。
「いえ、彼が不登校になる少し前――っていうかそれを説明する前に一つ言っておかないといけないんですが、彼が、私がアマノジャクと呼ばれるようになった原因なんです。それでちょっとムカついたので脅すようなことを言ってしまいました」
先生はため息を吐き、「今すぐ日下部にメールしろ……」と言ってきた。
『みんな心配してるから、もう一回学校に来て』
先生にもこれでいいだろうか、と確認をとってから送信。
数分後、私と先生は何故か校長先生に呼び出された。
「天之路さん、君がメールしたおかげで日下部くんは明日から登

校してくれるそうだ」
「それはよかったです」
「まったくだ！」
何故か興奮した面持ちで机を叩く校長先生。
「そ、それで、用件は終わりですか？」
びくびくしながら確認すると「ああ。もう用はない」とおっしゃったのでドアを開けて外に出る。
「失礼しました」
そう言ってドアを閉じようとすると、慌てて校長が追いかけてきた。
「天之路さんと話しをする時は真逆の事を言わないといけないんじゃ無かったのか！」
あなたもですか校長……
「わ・た・し・はっ！　ア・マ・ノ・ジャ・ク・じゃっ！　あ・り・ま・せ・んっ！　あ・ま・の・じ・つ・づ・ま、です！」
そこから本日二度目の事情説明。やんごとなき事情があってうんたらかんたら……
いちいちこんな説明しないと会話が成立しないなんて。もういやだ、改名したい……
「おお、すまんすまん。それで、どうやら日下部くんはとうとう部屋からも出て来なくなったらしいんだ。いったいどんなメールを送ったのか見せてもらえるかな？」
ようやく理解した校長が困り顔で頼んできた。
べつにやましいことは無いので送信履歴からメールを開いて見せる。
「ふーむ……なにもおかしなところは無いのに……もう一度送ってくれるかな？」

「わかりました」
『みんな心配してるから早く学校に来て欲しいな。もう一度だけでいいから、ね？』
校長も納得の出来栄えだ。迷わず送信。

数分後、一本の電話がかかってきた。

『ちょっと！　ウチの子がドアの隙間から遺書を出して来たんだけど！』
何故に？　ああ、もしかして！　私は急いで『いままでのメールは全部本当！』と送信。

次の日から彼は、笑顔で登校を再開した。
まったく、迷惑な話だ。どうやら彼は私が送った「みんな心配してるから、もう一回学校に来て」を　「誰も心配してないから、二度と来なくていいよ」と曲解したのだそうだ。そこに追い討ちをかけるように似たような内容のメールを送ったものだから――

誰だ、私をアマノジャクって言ったのは。

……ああ、彼だった。

落ちない話

「私、『草食系男子』って言うの？　あれ嫌いなんだよね」

昼休みに、天王寺巫女（てんのうじ みこ）が話しかけてきた。耳を澄ませば教室の隅で男子の仕分けをしている女子たちの声が微かに聞こえ、「二番のあいつは肉食系」などと言っているようだ。なるほど、それで、か。と納得していると、天王寺は眉を寄せて腕を組み、不機嫌そうな顔になる。

「特に許せないのが『ロールキャベツ系』ってヤツ。なにそれ、ロールキャベツしか食べないって言うのならまだいいけど、『見た目は硬派で中身は軟派な人』って、それただの軟派な人じゃない！」

小さな声で怒鳴るという、とても器用なことを平然とやってのける天王寺。どうやら今の声は僕にしか聞こえていないようで、教室の端では僕が草食系かロールキャベツ系かでもめていた。なんとなく腹が立つ。

「そういえば最近よく聞くよね。草食系、肉食系、ロールキャベツ系、って」

全くと言っていいほど関わりの無い女子に対する怒りは一瞬で過ぎ去った。代わりに結構関わりのある女の子との会話に意識を向ける。

ちなみに、僕の中では、女の子≧少女＞＞＞＞＞＞越えられない壁＞＞＞＞＞女子。となっている。ただのクラスメイトで性別が女だと『少女』。気兼ねなく話が出来るのが『女の子』。人の影口

を叩いたり、自分好みの異性と話す時以外は必要最低限の単語しか発しないのが『女子』となっている。一度女子にランクされた者が少女にランクアップしたことは、今のところ一度も無い。逆は度々ある。

「なんで肉食、草食って来てロールキャベツになるのよ。普通に雑食でいいじゃない」

呆れたような口調で女の子、天王寺は流行に対する反逆を口にした。実を言うと、僕もそういった呼び方は嫌っているので、天王寺との会話に対して好意的だったりする。しかし、それを悟られると色々と面倒なので、あえて興味が無いふうに「そうだねぇ」とだけ言っておく。

「そもそもがっついてるからって肉食系ってどうなの？　控えめな肉食動物もいれば、好戦的な草食動物だっているじゃない」

「そういえばワニとかはじっくりと餌が来るのを待つよね」

「でしょ！」

自分の意見を認められたのがそんなに嬉しいのか、天王寺の顔が、ぱぁっと華やいだ。

「でも」と、口にした途端、明らかに不機嫌そうな顔に戻る。「それ以外にいい呼び方があるかな？」

否定ではなく疑問だと分かった瞬間に、天王寺の顔は名探偵が推理をしている時のそれになった。

「……要は軟派な人と硬派な人を区別できればいいのよね？」

「それと、見た目硬派だけど軟派な人もね」

む～、と天王寺は、人差し指で下唇を押さえながら唸り、三秒でひらめいた。

「無脊椎系男子ってどう？」

「……軟派だねぇ」

一応肯定的なニュアンスだったためか、「我ながら恐ろしいほどのネーミングセンスだわ」と満足気に頷いている。

「ちなみに硬派だと？　脊椎系？」

「脊椎系は、見た目硬派で軟派な人。ほら、硬い骨の中には髄液が流れてるらしいし」

「じゃあ硬派は？」

「うー……んと、甲殻類でいいや」

どうやらこの話題に飽きてきたらしく、適当に打ち切った後は「今日の夕飯は蟹か海老がいいな」と夕飯のリクエストが始まった。

「蟹は高いからなぁ……エビフライでいい？」

「いいよ」否定ではなく肯定のニュアンスだ。

そこで始業のチャイムが鳴り、各々席に着きだした。

教科書を机に並べながらぼんやりと考える。

同年代の女の子と同棲している僕は何系男子なのだろう。

落ちない話（後書き）

落ちない話＝オチ無い話

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6890z/

おもかき！

2011年12月30日02時47分発行